

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史まんぼ

— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 —

第70回 助右衛門さんと白狐の話

今回の伝説は、市場にある「正一位村山稲荷社」の縁起にかかわるものです。

江戸時代の中頃、市場に住んでいた助右衛門さんが畑仕事をしていた時、突然、真っ白な大きな狐が助右衛門さんの背中に乗って来ました。この白い狐は真っ赤な眼をしており、なれなれしく助右衛門さんの顔を見つめているので、助右衛門さんはあっけにとられ、じっと白い狐の様子を見ていました。

しばらくして白い狐は助右衛門さんの背中から飛び降り、林の中に姿を消してしまいました。

助右衛門さんは何か不吉のことが起こるのでは

ないかと悩み、町の人たちに相談することになりました。すると、ある古老が「白狐は京都の伏見稲荷社のお使いで、田畑を守る神であるので、不吉なことではなく吉兆のあらわれである」と言うのです。

そこで町内の人たちは靈験あらたかな「伏見稲荷大明神」のご神霊を分祀することを決め、助右衛門さんや町内の総代数名が連れ立って京都へ出かけますが、神霊分祀は許されませんでした。

引又町に帰った後も、神霊分祀の思いは消えるどころかますます高まり、再三にわたり京都伏見稲荷社へ神霊分祀のお願いをしたところ、ようやく明和5年(1768)に分祀が許され、助右衛門さんと白狐が出会った畑の場所に村山稲荷社を建てることができました。現在も初午の日(月遅れ)に稲荷講(現在の講名は志木伏見稲荷講)の人たちが集まり催しを行っています。



▲助右衛門さんと白狐
(絵・高橋長次)



一人にさせない、ともに支える社会へ

厚生労働省の調査(令和6年)によると、高齢者の単身世帯は903万世帯と過去最多を記録したとのこと。孤立死といった深刻な問題も発生しており、警察庁の統計(令和6年調査)では自宅においてひとり暮らしで亡くなられた方は全国で約7万6千人。そのうち65歳以上の高齢者が約5万8千人と8割近くを占めています。

本市も例外ではなく、ひとり暮らしの高齢者は、10年前の平成27年は3,547人であったのに対し、令和7年は5,363人。実に51%も増えています。残念ながら高齢者の孤立死も本市で毎年数件発生しており、今後においても発生リスクが高まる懸念が懸念されます。

本市では、こうした課題を見据え、市内のコンビニエンスストアや新聞販売店なども連携を図りながら、高齢者の日常の様子や体調変化といった細かい気づきを市に情報提供していただき必要な支援につなぐ「ホッとあんしん見守りネットワーク」や、住居内で急病などの緊急事態発生時にボタンを押すだけで自動的に消防署へ通報さ

れ、直ちに救急などの活動を行う「緊急通報システム装置」の貸与など、ひとり暮らしの高齢者やその家族が安心して暮らすことができる環境を整えています。

さらに、今年度は新たに人感センサーや電球の消灯点灯で人の動きを検知し、その情報を離れて暮らす家族などに通知するといった、ICTを活用した民間の見守りサービスの利用を後押しする「高齢者見守りサービス導入の助成」を実施します。市内在住で65歳以上のひとり暮らしの方が対象で、最大15,000円の補助が受けられます。ぜひ長寿応援課までお問い合わせいただければと思います。

これらの取組に加えて、高齢者の社会的な孤立を防ぐためには、「顔の見える地域のつながり」を作ることが大切です。町内会への加入もその方法の1つです。近所の方との関係を築くことで、困ったときに「助けて」と言える関係性が生まれ、定期的な集まりや活動を通じて自然と見守り合える「共助」のネットワークにつながっていきます。市内には38の町内会があり、夏祭りや盆踊り、防犯パトロールなど、魅力ある活動も展開されています。また、民生委員・児童委員の皆さんは身近な相談相手として住民の立場に立った見守り活動を展開しています。

地域の絆づくりは、災害時の助け合いや子育て支援など、自分自身の安心につながります。高齢化が進み、地域コミュニティが希薄化する中、近所の皆さんが互いに協力し合い、助け合う「共助」の輪は、これまで以上にその重要性が高まっています。地域での小さなつながりを大切にすることが、誰もが安心して暮らすことができるまちづくりへの第一歩です。